



知進寮 仏間の扁額「樹心」



ひとかけら 一欠片の経験

学校長 飯山 等

今年2023年の干支は癸卯。十二支は兎の年にあたります。年末年始を岐阜の実家の自坊で過ごす私は、ここ数年、御門徒の方への年頭の挨拶を、自坊の掲示板に筆を持って書くことに

しています。兎年の今年は、十二支に因んで「跳」の一文字を書きました。今年36歳になる長男が、この4月から4年間のインド勤務を命ぜられたことを話してくれたことも少なからず影響したのでしょう。卒業される皆さんにとっても、この年が「跳ねる」一年となりますように、「跳」の字を書きながら思ったことです。

皆さんと同世代である将棋の藤井聡太さんの活躍については知っているひとも多いかと思えます。私は彼がプロとしてデビューした中学生の時、誕生日がたまたま私と同じと知ったことからファンになり、瞬く間に8冠あるタイトルのうち5冠(竜王・王位・叡王・王将・棋聖)を獲得するという想像を超える活躍に圧倒させられるだけでなく、折々に彼が発する言葉に心深くまで震える経験をさせられ続けています。将棋を題材にした小説集『神の悪手』の著者の芹沢央さんは、2021年11月に行われた竜王戦(豊島将之竜王に藤井聡太さんが挑んだ)第4局を観戦して、「近くで見る藤井さんは勝敗のことを考えているように思えなかった。難しい局面で新しい何かを見る、というきらきらした思いのようなものを感じました」とその感想を述べています。「難しい局面で新しい何かを見る、というきらきらした思い」という一節に、私自身、あれこれに右往左往する自身の生の現実を省みて、大いに恥じ入らざるをえませんでした。

藤井さんを通してすっかり《観る将》(将棋を実際に指すのではなく、観るのが趣味のひと)の一人となった私は、新聞や雑誌の記事、ネットテレビなどの観戦を通して、他の棋士の方にも関心が拡がり、殊に朝日新聞の北野新太記者の描き出す棋士の間人様が魅力的で、いろいろなひとに心惹かれるようになりました。皆さんは羽生善治という棋士を知っていますか。1996年には当時の将棋界の全7タイトルの独占を達成し、全タイトルに「永世」の称号を持つ、将棋の歴史に大きく響き立つ大棋士です。32歳差の二人は、羽生さんは「平成の天才」と、藤井さんは「令和の天才」と称せられています。羽生さんは現在タイトル保持者ではないので「九段」と呼ばれます。その彼が次のように言っています。「私は52歳ですが、力が落ちたとは思っていません。(加齢による衰えという)社会

常識が隅々まで浸透しているので、自分自身も影響を受けないのは難しいですが、経験の中から本当の力として使えるものを見たいと思っています」と。「経験の中から本当の力として使えるものを見たい」との言葉に、私も自身の厳しい刷新と矜持の気持ちを失うまいと思うことです。

羽生さんの深い人間性から語られる魅力に満ちた言葉を、先の北野記者が私たちに伝えてくれています。「一局の将棋は後悔だらけですが、後悔の多い人生こそ充実している。甲乙付けがたい局面、難しい状況にたくさん出会っているということですから」と。記者自ら胸が熱くなったと書いているように、読んだ私も記者の感動に共振して熱くなりました。「後悔の多い人生こそ充実している」に心震えました。また、2018年のインタビューでは次のような印象的なコメントをしています。「将棋の本質が謎に包まれているという感覚は10代の頃も40代の今も変わりません。現れる新手や新たな戦術などを目撃したり体感していると、やはり将棋の奥深さのようなものを感じます。月日を重ねれば重ねるほど、リアリティーを持って感じるような奥深さなんです。非現実的な話ですけど、例えば今後100年間、あるいは200年間にわたって将棋を指し続けたとしても、本質を理解するための進歩を感じたり、将棋の全体像を見渡せるかと言ったら、見られないと思うんです。だから、自分自分なりの将棋を指していこう、という感覚を持ちます。たとえ限られた時間だったとしても、将棋が持つ膨大な可能性の中の一欠片(ひとかけら)の経験が自分にとって得難いものであるならば、それでいいんじゃないかと思うようになりました」と。

私は読みながら、いつのまにか記事の中の「将棋」の語を、「人生」に置き換えて読んでいて自分に気がつきました。「人生の本質は謎につつまれている」、「長きにわたって生き続けたとしても、人生の本質を理解するための進歩を感じたり、人生の全体像を見渡せるかと言ったら、見られないと思う」、「月日を重ねれば重ねるほど、リアリティーを持って感じるような奥深さ」、「たとえ限られた時間だったとしても、人生が持つ膨大な可能性の中の一欠片の経験が自分にとって得難いものであるならば」、というように。将棋が人生そのものであるひとの言葉だからこそ、私に何の操作的な感情も介在させないで、そのままに「人生」の真実として感じさせたのでしよう。

まだまだ、学ぶことの多い人生です。